

概要

地球環境問題は、人間と他の生命のあり方についての哲学的考察を求めている。人間中心主義とか生物中心主義、生態系中心主義という言葉が繰り返しあらわれるところにも、そのことの証明がある。人間もまた、他の種と同じように、地球上に進化の結果として生まれた一つの生命に過ぎない。しかし、その人間という種は、地球の環境を変化させるほどまでにその知識と技術を肥大化させた。それは、人間と他の生命との物理的な距離を大きくするとともに、精神的な距離も大きくしていった。環境問題を解決するためには、さまざまな政策が必要だが、そのまえに、人々の意識において地球における他の生命との距離を正しくとらえ直す必要がある。本稿では、表現と固有性という概念を用いて、生命の本質を把握し、人間と一般の生命との距離を確認する試みを行った。日々私たちが生活の場で行っている表現行為と生命一般の本質的な表現行為の深い関連性を確認することによって、他の生命の行為に対する共感や感情移入のための一つの道筋を与える。

1. 生命の本質

『沈黙の春』（レイチェル・カーソン）の冒頭にある短い寓話は、黙示録的な響き、また思想的な高さ、さらに文章の美しさにおいて、人に深い感動を与えるものとなっている。"There was once a town in the heart of America where all life seems to live in harmony with its surroundings." と書き始められている。そして、生命の季節ごとの華やかさとにぎやかさにあふれた町の姿が生き生きと描かれる。しかし、その町はいつの間にか奇妙な静寂に覆われるようになり、"It was a spring without voice." となってしまったのだ¹。

環境問題とは、生命の問題、生命の存在様式に関わる問題である。環境問題によって地球上の無数の生命が影響を受け、その影響を受ける生命の中には当然人間も含まれるのだが、その人間はまた環境をラディカルに変える主体でもある。

環境問題は、「この地球上で人間とはどのような存在であるか」を問いかけている。無数の生命の中で人間とはいったいどのような生命であるのか。人間中心主義、生物中心主義、あるいは生態系中心主義、技術中心主義など、環境の中で人間のあるべき位置についての様々な考え方が表明されていることから、この問いかけの重要性を確認することができる²。

人間とはどのような生命であるのかという問いに答えるためにも、われわれはまず、そもそも生命とは何なのかという問いに答える必要がある。それは当然、個々の生命の特殊性を描き出すのではなく、生命としての共通性をとらえることになる。ただ、それはすぐに自明な答えがもたらされる問題であるように思える。

たとえば、遺伝情報の要素と構成、ATP を介したエネルギー変換などはすべての生命に共通する。それらは、すべての生命がある地球的時間のある空間の一点から生じたことを示している。で

¹ 上智地球環境学会『地球環境学』（No.2、2006年）掲載予定

² 上智大学地球環境学研究科教授 <http://washida.net>

は、それが生命の本質だといえるだろうか。生命の機能を、の細胞レベルの機能に分解するミクロ的な生物学の視点からは、そのようにとらえてもよいのかもしれない。しかし、そのようなとらえ方から、生命の本質についての私たちの実感を構成することは難しい。なぜなら、生命は一つのマクロ現象だからである。生命を小さな構成要素に分解してしまった結果としての共通性では、生き生きとした生命の姿からはかけ離れたものになってしまっている。このような還元論(reductionistic)な観点は、近代科学の本質的特性なのだが、生命の本質をとらえる上では有効ではない。

自然科学の立場から、比較的マクロな生命像に迫ったものとして物理学者 E.シュレディンガーの『生命とは何か』のエントロピー的アプローチがある³。シュレディンガーは、生命だけに存在する特徴は何かと問いかけて、それがエネルギーの利用が結果としてエントロピーを増大させて平衡状態になってしまうことを、生命は長期にわたって避けることができるというところにあるとする。

熱力学の第二法則は、熱的な変化が常にエントロピーを増大させる方向を持っていることを示している。閉じた系の中では、熱は拡散し物質もまた拡散する。生命あるものも、物質の拡散、熱の拡散は生命を一個の物資と見れば死を意味するが、生命は環境との代謝を通して拡散を免れ、そうしない場合よりもはるかに秩序ある存在として長く自己を持続させることができるというわけである。

生命の死は、ミクロ的な現象ではなく、マクロ的な現象である。一個の生物の圧倒的多数の細胞が依然と同じように活動を持続させる力を持っていても、生命体としては死んでいるということはある得る。

その意味では、生命というものを生と死を繰り返しながらも、種としては持続するような実体として本質をとらえることは間違っていない。個体として死を免れているような生物種は地球上には存在しないだろう。少なくともまだ見つからない。死を免れるような種は、この地球上で存続することは困難なはずである。変わらない種は、変化する地球環境に対応できないからである。生と死の繰り返しこそ、種の変化を約束するからである。

死との対比ではなく、生きているものとしての生命の本質はどこにあるのだろうか。そして、われわれの生きていることの実感を裏付けるような、生命の本質の把握は可能なのだろうか。

もう一度、『沈黙の春』に立ち返ってみよう。化学物質によって失われた春は、鳥も鳴かない静かな春だった。逆に、豊かな自然が見せる季節ごとのにぎやかさや華やかさの理由はどこにあるのかを考えてみなければならない。

地球上の自然は無数の多様性を持っていて、特定の自然から普遍的な命題を引き出すことは危うい。そのことは理解していても、われわれが現にこの日本に生きている事実をふまれば、日本の自然を例とすることも特別間違ったことではないだろう。日本人は季節ごとの深く全体的な変化をもたらす自然に囲まれて生きている。

愛知県の設楽町に住む伊藤仙二さんが書いた「寒狭川の四季」という短いエッセイがある。伊藤

さんは、奥三河を流れる寒狭川の夢が淵のほとりに住んでいる。エッセイは、次のような文章で始まっている⁴。

「寒狭川の四季折々の風物はどれをとっても一幅の絵巻物です。

川のしぶきが風に乗って日脚の延びた岸辺の猫柳がふくらみ、まんさくの花が風にゆれ、はんの花がつつやかにせせらぎに映るころ、アメノウヲの解禁です。岩場の苔の中にしょうじょうばかまの花がつつましく咲くと、川ぜんまいもたくたくましい芽をのばします。

四月は稚鮎の放流です。川虫の羽化を追う白ハエが川面をぴょんぴょんと跳びます。

夕まぐれ河鹿笛がひとしきり心に滲みわたる声を聞かせてくれます。

岩燕の大群が竹桑田橋の橋桁の裏へ巣を造りはじめます。カワゲラ、トビケラ、カゲロウなど、川虫の成虫が川上に向かっていっせいに飛行していきます。」

自然のきらめきが心にしみいる文章で描かれている。このあとも、六月の宵闇の中を舞う蛍の姿、それは幼い日の幻であると書く。そして、秋の風情は次のように描かれる。

「秋の寒狭川は野鳥の楽園です。木の実や川虫を求めて、終日たくさんの野鳥が訪れます。ひとしきり紅葉に彩られた樺や榎の大木も颯々と吹く風に木の葉が川瀬に流れはじめます。兩岸の山々はいっぺんに淋しくなります。川原薄の穂がさやさやと風になびき逆光に映えるさまは天然の極致とさえ思われます。おだやかな日中の日差しのなかに川面から微かに舞いあがる小さな川虫の成虫、限りなくたくさんの赤とんぼ、はいすがり、あか蜂、だんご蜂、谷間の空間は近づく冬を迎えるために、たくさんの小さな生物たちが乱舞しているのです。」

たとえ都会にいて、伊藤さんが描くほどの自然の輝きではなくても、われわれは季節を日々感じることができる。上智大学の脇にある外堀の土手の自然は豊かだ。春の桜はもちろん、梅雨時のあじさいの青色の鮮やかさ、その下草となっているシダのフラクタル模様の美しさ、夏の蝉の激しい鳴き声、秋の虫の声、キンモクセイの性を思わせる香り、感情的な赤色を示す彼岸花、いずれも、自然の時の刻み方を強烈にアピールする。季節の変化を確実に、豊かに私たちに伝えてくれる。

伊藤仙二さんの文章が、結晶のように季節感を描写したものであるといえるならば、人と季節ごとの生物たちの関わりを描いたレオポルドの『野生のうたが聞こえる』の描写は記述的なものだが、自然に対する愛着が決定的な要素となっているという点では共通している。

これら自然の描写の中に描かれている決定的な要素は「生き物たちが自己の存在を他者に示そうとする必死の訴えである」といってよい。鳥たちのさえずりも、待ちかまえたように咲く花々も、蛍の光も、うるさいほどの蝉の鳴き声も、自己がそこに存在し、同一種である場合もそうでない場合もあるが、他者に対してのアピールである。

そのように考えれば、生命とは何であるか、生命の本質に対する生き生きとした定義が自然に思い浮かんでくる。生命とは表現する実体である。生命の本質は表現することにあるのだ。

2. 境界と表現

生命には必ず内側と外側を区別する境界がある。ウィルスは境界を持たないという点で、ここで

議論する生命には含まれない。単細胞生物の場合は、細胞膜などの境界を持っている。多細胞生物もまた必ず何らかの外側と内側を区別する境界を持っている。人間の場合も、皮膚などの様々な境界が確認できる。また、境界が内側と外側を区別するものであれば、その境界は閉じた領域を作っているものでなければならない。その閉じた領域こそ生命的機能の存在する場である。

生命が、生命であることを持続させるための必要条件の一つは、この境界を維持する能力を持っていることである。逆に、生命はその境界を維持する能力を失えば、それは生命としての死を迎えたことになる。

生命が境界を維持し、閉じた領域としての内側を持っていることは、内側と外側が同一のものではないことを意味している。生命はその内部において、外界との異質性を維持する実体なのである。

この点はエネルギー学的 (energetics) にも考えておくべきである。内側と外側が異質であることは、その境界が崩壊して内側と外側が同一化した場合よりも、エントロピーが低いことを意味している。有機質で構成された境界とその内部を、相当長期にわたって持続させるためには、エネルギーが利用される。たとえば、夏にクーラーをつけることによって、外と内との温度差を作り出すことができるが、それは利用可能なエネルギーを利用不可能なエネルギーに転化させ続けることによって維持できる。したがって、部屋の中と室外機を置いた外側とも含めた全体としてのエントロピーは増大しているのである。

生命もまた、境界を維持していることによるエントロピーの低い状態を、エネルギーを利用し、その利用した結果としてのエントロピーの増大を外部に引き起こすことによって維持しているのである。

生命の必要条件として、このように内側と外側を区別する境界にこだわると、生命はヘリウムを詰めたゴム風船のようなものであればよいかのように錯覚される可能性もある。あるいは、先に例示したクーラーによって意図的に温度を下げられた部屋や建物のように思われてしまうかもしれない。

生命にとって境界は確かに本質的な条件であるが、それは必要条件であることにとどまる。生命が生命であることのさらに決定的な条件は、外部からはとらえられない内部にある何ものかを、外側に示していく、ダイナミックで積極的な機能を持っている点にある。そして、このことがまさに表現 (expression) なのである。

ここにおいて、私は表現という概念を大きく拡張させている。私たちは表現という言葉、なによりも人間的行為に限定させて用いる場合がほとんどだが、ここでの表現は、すべての生命が有している機能にまで拡張させているのだ。

普段、どのように表現という言葉が用いられているか、少し考えてみよう。

芸術家にとって作品は表現である。芸術家は作品において、内部に醸成されたオリジナルなイメージを形象化する。この場合に使われる表現という言葉は、昇華された意味合いを持ってわれわれは受け止める。もちろん、表現はそればかりにおいて用いられるのではなく、あらゆるエンターテインメント、スポーツ、さらには囲碁や将棋なども含めて、プロフェッショナルたちの行為や言葉

表現されたものとしてふさわしく思う。

さらにもっと日常的な場で、普通の人が他者に対して、自己の何かを示そうとするとき表現という言葉を用いる。

しかし一方で、自然科学者が、自然界の物理現象を解明した論文について、その論文をその科学者の表現であると語ることは、適切な言葉遣いではない。そこに明らかにされているのは彼自身の何ものかではなく、自然界に秘められている法則あるいは論理などだからである。

表現は、さらに一般的な人間行為に広げることができる。人間の行為の中で、他者の強制においてなされたもの以外の行為は、ここで用いている意味において基本的に表現である。たとえそれがきわめて日常的な行為であったとしてもである。些末なことでは、起きる時間や食べるものや着るものまで、あるいは家族との会話のために発せられる言葉や、恋人に語る言葉に至るまで、それらはすべて表現である。結婚し、子を産み育て、そして新たに家族を構成することもまた重要な人間の表現行為である。

このような表現という概念の一般化は、自然に、生命一般にまで広げることができる。枝を広げた木々の形は、特別に強制しない限り、どの形も違ったものになっている。それは、環境に反応したものであるともいえるが、少なくとも反応した主体としての個々の木の、内部的な何ものかの機能の表現である。たとえそれが、単細胞生物であるゾウリムシの動きであっても、巨大なシロナガスクジラの動きであっても、それらはまた、その生物の内部の何ものかの表現になっているのである。そして、鳥のさえずりや咲く花の美しさが、それらの生命の表現であることは明らかだ。ここに来て再び、レイチェル・カーソンの春の問題に立ち返ることができる。失われてはならない春の華やかさやにぎやかさは、生命の本質の発露なのである。

ただし、表現であるために、まず強制された行為であってはならないと書いたが、それは強制された行為のすべてが表現ではないといっているわけではない。それは強制や自由といった概念の内容にも依存している。あたかも強制されているかのような生命の行為の中に、表現が含まれることは十分ありえる。

3. 固有性について

次に、いったい生命は何を表現しているのかが語られなければならない。前節では、内側にある何ものかを書いておいたが、生命の本質とまで言い切りながら、表現されるものがこのような曖昧なものでは、許されないだろう。

この生命の表現行為は、その生命を取り巻く環境に対する単純な反応ではない。あるいはメタボリズムのように物質に関わる環境との相互行為ではない。もちろんそれらとも密接な関係を持っていることは確かだ。生命の行為は、そのほとんどが環境に対する反応、メタボリズムを主要内容とする見られなくもない。芸術があえて昇華された表現であるといえるのは、このような生物物理的な反応・行為の様相がきわめて少ないからである。しかし、表現が人間のありふれた生活行為の中にも存在し、さらには生命的な行為一般に認識されるというのは、そのような生物物理的な行為

の中にも、表現に値する何か独自のものが存在しているからである。

表現は環境との相互関係によって動機づけられる行為ではなく、内側から外側へという指向性を持った行為である。その内側にある何ものかは、他者にとっては直接とらえられないもの、さらにはその内側を構成している主体そのものにとっても、確かにはわからないものというべきだろう。それを外側へ表出させる行為が表現なのである。

内側のものを一般的にあらわせば、それは固有性である。固有性は個性ではない。個性は他者との比較において成立する概念であるが、固有性とは、他者ではないという事実の中に備わっている特性である。個体が他者ではない、唯一無二の存在であることを示している特性である。すべての個別の生命は、当然、その生命以外の個別の生命ではない。その意味で、あらゆる生命が固有性を備えている。

固有性の最もわかりやすい重要な内容の一つは、遺伝的固有性である。有性生殖は、多様な個体を生み出す。その組み合わせの膨大さから、一卵性双生児などの場合を除けば遺伝的に同一の個体はまず存在し得ないと結論づけてもよい。有性生殖が生み出す、個体の遺伝的多様性はそれ自体興味深いテーマである。今日の環境問題との関係においても、生物多様性の保全などのテーマとも深い関連を持っている。しかし、ここではあえてこの問題には深入りしない。

この有性生殖は重要だが、生命の固有性の中で占める比重を過大に評価してはならない。

有性生殖ではなく、無性生殖があり、さらには単なる細胞分裂によって増殖する生物もある。これらの場合も、遺伝的変異は必ず発生するが、それでも遺伝的多様性が有性生殖に比べると極端に小さくなる。さらには、人間の場合の一卵性双生児のように遺伝的には同一である二つの個体も実際存在するのである。しかし、このような状況においても、固有性が失われるというわけではない。

遺伝以外に、きわめて単純な事柄だが、二つの個体が同じ時間的かつ空間的な位置を占めることはできないという点に、固有性のもう一つの重要な根拠が存在している。ある時間ある場所に二つの生命が同時に存在することはできないのである。時間と場所が違えば、違う固有性を持った生命と見なさなければならない。

生命の表現は違った時間と場所においては、違った内容で表現される。私は先に、表現は単なる環境に対する反応ではなく、内側から外側へという一方的指向性を持っていると指摘した。これは環境が内側に与える影響を無視することではない。環境はまた内側を作る。環境によって作られた内側が、創出された自己の外部化として表現は成立する。メタボリズムもまた、それ自体が表現ではないが、内部の形成要因としては重要な機能である。

ここでの環境は広い意味を持っている。生命が、母胎の中で生まれたその瞬間から、死を迎えるまでに、その生命に影響を与えるすべてのものが環境である。このような環境が全く同じである生命が二つの異なった個体であることは不可能だ。個体が環境によって形成されるという意味では、個体は唯一無二であり、決定的な固有性の根拠となる。

環境は空間的な次元と時間的な次元の両方を持っている。同じ場所にいたとしても、時間が異なればその環境も異なっている。しかし、単なる時間と空間の二つの次元によって決まるものでは全

くない。環境は遺伝子と同様に多様であり、無数ともいえる要素の組み合わせによって成立する。

生命は、無数にある環境の中の一つの環境中に生まれる。生まれる生命にとって、その環境を選び取ることはできない。芥川龍之介が『河童』の中で描いた、お腹の子に生まれたいかどうかを問いかける、河童たちのお産のシーンのような状況は、実際の生命ではあり得ないのである。

遺伝的要因と環境要因によって、生命の固有性は確定する。そして、生命はその固有性を表現する。当然そこで、固有性をなぜ表現しなければならないのかが問われなければならないだろう。生命が表現へと動機づけられる理由である。この問題を考察する前に、生命と主体性の関係を論じておく必要がある。

4. 固有性と主体性

生命は遺伝的要因と環境要因によって固有性を作られることを明らかにした。しかし、生命は自ら環境を作り上げたり、あるいはさらに自己自身を作り上げる、そのような主体性を持っているのではないかと指摘される読者はいるだろう。すなわち、固有性もまた主体的に作られるのではないかというわけである。

生命の中で最高度の主体性を持っているのは人間である。したがって、この問題は人間を念頭において考察すればよい。

私たちは、上に書いたように、自己の固有性のすべて遺伝的要因と環境要因に帰すことを了解できるだろうか。少なくとも、社会的にはそのようには認めていない。たとえば、それは法律に表現されている。すなわち、人が罪を犯す行為はその罪を犯した人間の責任に属するものと判断される。特別に精神的疾患がある場合には、その責任が問えないので罰を与えることをしない。これは、当然のこのように見える。人が罪を犯すのは主体的行為であり、その人間に責任があり、したがってまた罰が加えられなければならないというわけである。

ただし、この罰も最高度の死刑にまでいくとどうなるだろう。死刑とは、その人格の全体を抹殺するのである。人が死刑として罰せられるのであるから、その責任は人格全体に関わる責任である。しかし、いったい、人はそれほど完全な主体性を有しているのだろうか。

たとえば、仮に、その人格の7割は環境と遺伝的要因によって形成され、その人間の主体的に選び取った人格的内容は3割にすぎないとしたら、その人間に問える責任は3割だけであり、人格のすべてが否定されることにはならないのではないかと考えられる。もちろんこのような主体的な責任の割合を確定することは不可能だろう。ただ、私たちは人間の脳の機能とその精神作用の理解が進んできた今日において、主体性とは何かを問い直されなければならないようになってきていることはまちがいない。

さらに、主体性の内容と程度について考察しよう。

私たちは、日々の行為を自らの選択によって行っていると思っている。もちろん、大切な進路の選択において、周囲の助言を受けたり、事実上の強制のよって選び取らされたりすることはある。しかし、すくなくとも、私たちは自ら選択することができることを信じているだろう。したがって、

自己の主体性を疑う人間はきわめてまれである。その一方で、選択する主体としての自己が過去において形成されたことを疑う人間もまたいないだろう。

確かにそうなのである。存在していると信じて疑わない主体的自己もまた、過去において形成されたのであり、それはまた、ゼロから完全に創造されたものではないのだ。私たちが自ら自己を形成したということもできるかもしれない。しかし、そのようなものとしてさかのぼることができるのもある時期までである。幼い時期までさかのぼれば、自己の形成を主体的に選び取ることができない期間になり、その時期には自分はひたすら遺伝と環境の影響にしがっていたことになるのである。

すなわち、あたかも自明のような主体としての自分も、遺伝と環境から形成されてきたものなのである。その意味では、独立した主体性などはどの人にも存在しないのである。すなわち、人はすべて環境と遺伝的要因によって形成されるといわれるべきである。そして、自己にあると信じて疑わない主体性も、このような見方にたてば幻想にすぎないのである。

それでも、社会が主体性を重視していることはまちがいない。また、一人一人の主体性を認めないでこの社会を維持することもできないのである。社会が認める個々の人間の主体性は、その意味で一種の擬制なのである。個々人の日常的錯覚に基づいた擬制によって、私たちはこの社会を維持しているといつてよい。

仏教は、有身見という煩惱を問題にする。有身見とは、自己とか自我があたかも現実存在するという錯覚に陥ることによって生ずる煩惱である。本来それらのものは、あらゆる因縁に基づいているという意味で「空」であるというのが仏教の教えである。ある意味、これは主体性に関する社会の擬制と人間の幻想を鋭く衝いているといえなくもないのだ。

5. 「試み」と表現

生命の固有性とは、そのもの以外の何ものでもない、唯一無二の存在であることの証明であるが、しかし、同時に、それはあらゆる主体性を欠いているという意味での空虚さをも持っていることになる。このような矛盾を抱えた存在としての生命は、なぜ表現に向けて動機づけられるのであろうか、この点について考察を加えよう。

生命の、遺伝的複雑性と自己形成に関わる環境の複雑性は、その固有性の内容を外部からは完全なブラックボックスにしてしまう。すなわち、固有性の内容を遺伝的要因や環境要因に帰することが、外部からは不可能になってしまうのである。もちろんそれが、その生命自身にとって、それらの関連性が把握されるということではない。その意味では、自己の固有性にとってその自己自身が外部的なものであるといってもよいのである。それは、自分の病気の内容を自分自身では知りようがないことと似ている。

複雑性を極限まで内部化させた自己であるからこそ、生命はその固有性を表現する動機に駆られるのである。自己がどのような意味において唯一無二の存在であるか、他者に対して、さらにまた自己に対して示そうとする、それが表現である。

この点は進化論とも整合的である。固有性は個体の多様性の基礎となっている。固有性を内在化させた個体が、それらしい生存の仕方を追求することによって、その個体の選択的対象性をはじめて明らかにすることができるのである。結果として、その種にとって、個体がより高い環境適合性を持っているかどうかを判明する。固有性の表現によってこのような選択が実現可能となるのだ。

したがって、固有性の表現能力の弱い個体は選択のチャンスを失う、あるいは、種として、その各個体が表現において弱ければ、種が存在感を失うことにつながるのである。この意味で、表現は、進化が求めた機能でもある。

このような生命一般のレベルから、特殊人間に限ればさらに語るべきことがある。私たちは、自分らしい行為にこだわる。それが固有性の表現である。それによって、人は自分というものの接近しようとする。いったい自分が何ものであるか、それは必ずしも自明ではないのである。特に若い自己形成期においては、自己の形成よりも自己認識は遙かに遅れてしまう。人は必死になって自分が何ものであるかをわかろうとする。それが青春期の深い憂鬱を生み出す。

このような固有性の表現は、個々の生命を一つの試みであると考えるとわかりやすい。試みる主体を考える必要はない。生命は、その固有性を背負わされて、生きることを強制されている。そして、その固有性がどのような結果を出すものであるかを試されていると考えるのである。試されているからこそ、その固有性を外部化して結果を出すことを余儀なくされる。表現しないことは、試作機を作るだけ作って、実験しないようなものである。

その試みが成功であるのか失敗であるのか、それは試みる主体の意図を知らない限り判断はできない。そして、そのような試みる主体を人智で認識することは不可能である。

6. 表現と自由

先に若干触れたことだが、強制された行為や機能は、表現としての条件を失わせる可能性を持っている。表現は自由な状況でなされなければならないのである。しかし、ここでの文脈からいえば、そもそも強制とは何か自由とは何かをまず明確にしておかなければならない。

自由は明確な定義を与えようとするとなかなか難しい。社会科学においても、F.ハイエクが議論しているように、社会体制選択の自由と個人的自由の異なった概念があらわれたりする⁵。しかし、われわれは自由論を議論することがテーマではないので、さしあたって簡便な定義を与えておこう。ここで用いている概念としての自由とは、外部から見て、その個体の行為の任意性に対して高い許容度がある状態である。言い換えれば、それはその個体が何をするかわからない状態を、外部的に許している程度が高いことを意味している。

このような定義は、人間にしか適応できないように思われるかもしれないが、必ずしもそうではない。今、私が原稿を書いているこの自宅の部屋の壁を小さな蜘蛛が這っている。八本の足を巧妙に動かして突然方向を変えるなど、動きは敏捷だ。蜘蛛に自己意識があるかどうかはわからないが、その行為は任意性に満ちていると考えざるを得ない。蜘蛛はその動きを自己コントロールしている。少なくともこの時点では、彼の捕食者に対する恐怖を感じているようには思えない。彼は内部的な

動機に基づいて自ら行動を決めている。したがって、彼は自由でありその行為において彼は固有性を表現している。

人間と比べて一般の生命は、環境を変えることができないから、あるいは人間のように高度に発達した大脳皮質を持っていないからひたすら本能に支配されているという意味において、自由からほど遠い状況であるといわれることがある。まさにそれは自由の定義の問題でもあるが、少なくともそのような自由のとらえ方はここで定義された自由と同じではない。蜘蛛は、自らの本能に突き動かされているだけだから自由ではないというのは、人間がすべて最高であり中心であるという見方から行われているのに過ぎない。少なくとも、今、予想外の動きを繰り広げている蜘蛛はとても自由であるように感じる。

人間は本能から解放されているから、あるいは環境を変える力を持っているから、そうではない一般の生命より自由だろうか。私たち人間の行動は、そのきわめて多くの側面が社会によって制限されている。社会が高度に発達すればするほどこの自由に対する制限が強くなっているように思える。逆にひたすら本能に突き動かされて生きている生命の方が自由であるとも言える。人間以外の生命は無自覚の自由主義者なのである。

自由についてももう少し違った定義を与えれば、個体の固有性を任意に表現することが許される状態であるということになる。ここで与えた自由の定義は、このような表現との関連において与えられている。

自由は、個体の固有性の外化、すなわち表現が任意に行われるという点において、進化論的意義を持っている。先に触れた F.ハイエクは、個人的自由を重視するイギリスの古典的自由主義を進化論的自由主義と呼んだ。自由主義には、社会に拡散して存在している個人的で、それでいて貴重な知識を生かす力を持っている、したがってまた文明創造機能があり、さらにまた社会を崩壊させるのではなく、自生的秩序を形成する力を持っていると喝破した。明らかにこの指摘は、ここまで語ってきた固有性の表現の意義と共鳴している。

ここまで、私は、生命の固有性を持っている根本的な矛盾を隠したまま、自由について語ってきた。したがって、壁を這う蜘蛛にしても、一個の主体として行為の任意性があり、したがってまた自由が底にはあると述べたのだ。しかし、すでに述べたように、生命は固有性を有するとともに、自己形成が遺伝と環境に完全に依存しているという点で主体性を欠落させている。ということは、あたかも任意性を持っているかのような蜘蛛の動きも、主体性を持った任意性ではないのである。彼を形成してきた遺伝的なものと環境的なものに完全に条件付けられた中での任意性である。あるいは、彼の固有性が外部的にはとらえられないものであるが故に、その行動が任意のものであるかのように見えるだけなのである。

人間についてもまたそうである。私たちは自らの行動の多くを自己が主体的に選んでいる、その任意性において自分は自由であると思っている。しかし、その自由の前提となる主体性は、根本的には仮想なのである。

あるいはこのように語るべきかもしれない。私たちの固有性は、極限の複雑性のもとに形成され

ている。したがって、その表現は必ずしも固有性の確かな反映となっていない可能性がある。その意味で、私たちの表現は試行錯誤であることを避けることができない。より自己の固有性に忠実な表現であるためには、失敗が許される状況がなければならない。その状況を約束するものが自由である。そして、表現がより洗練されるにしたがって、表現は固有性の明確な発露となっていく。それはいわば、自分が何のためにこの世界に命を与えられたかという、天命に気づくことであるといってもよい。表現がそのようなものになればなるほど、主体性という仮想が必要となる自由の概念から遠ざかることになる。表現が、主体性を欠いた固有性によりはっきりと支配されるようになるわけである。

このように考えれば、人間にとって、あるいはあらゆる生命にとって、自由は、自由を失うための大切な手段なのである。

7. まとめ

本稿の一つの重要な目的は、生命の本質は、人間とその他の生命とを区別することなく語ることができることを示すことだった。私はそのために、きわめて人間的な概念である表現を生命一般にまで拡張し、表現されるものとしての固有性、その固有性が主体性を欠落させていること、それはまた、生命が一つの試みとして理解されるべきことを明らかにした。

ここに示したことで、生命論が完全に記述されきってはいない。まだ、生命については語るべきことが数多くあるだろう。しかし、『沈黙の春』の冒頭の寓話が暗示するように、環境問題は人間と他の生命との関わりの問題であることを考えるならば、このような形で、一つの生命論の枠組みを示すことは一つの重要な意義を持った作業であると、私は確信している。紙幅が限られている関係で、具体例の記述を避けたために、全体が抽象的な議論で満たされることになったのは残念だが、本質的なものは書き込んだと思っている。また、機会があれば、具体例とともに議論を展開したいと思っている。

注

¹ Carson, Rachel, 1962, *Silent Spring*, (レイチェル・カーソン, 1974, 『沈黙の春』, 青樹築一訳, 新潮社.)

² この点については、エコロジーとの関連で議論される。詳細は、拙著「エコロジーと汎精神」(『ソフィア』第53巻4号、上智大学、2004年、pp.464-482.)あるいは「環境政策と自由主義」(拙著『環境政策と一般均衡』第1章、勁草書房、2004年。)などを参照されたい。

³ E.シュレーディンガー, 1951, 『生命とは何か --- 物理的に見た生細胞』, 岡小天・鎮目恭夫訳, 岩波新書、岩波書店。

⁴ 以下の伊藤仙二氏のエッセイの全文は、ご本人の了解のもとに当面、<http://eco.genv.sophia.ac.jp/senji02.html> に掲載する。

⁵ 以下に述べる E.ハイエクの議論については、次のような文献を参照。ハイエク, F.A., 1986, 『市場・知識・自由 --- 自由主義の経済思想 ---』, 田中真晴他訳, ミネルバ書房。ハイエク, F.A., 1986, 『ハイエク全集 5 自由の条件 I 自由の価値』, 気賀健三他訳, 春秋社。